

井戸ヶ谷遺跡

—発掘調査報告書—

1985

静岡県小笠郡大須賀町教育委員会



序

鈴木自動車工業株式会社大須賀工場の用地拡張に伴って行われた「井戸ヶ谷遺跡」の調査は、本報告書の刊行をもって完了いたしました。

本調査は、当初予測されたものと違った結果となった部分もありますが、大須賀町の歴史を知る貴重な資料を得られたことには変わりありません。

また、発掘調査に伴う歴史的環境の調査では第12代横須賀城主本多越前守利長の兄助久が一時期西大谷に住んでいた可能性を知ることができました。さらに三十六坊あったと伝えられる普門寺の往古の姿を知る手がかりを得ることになりました。

「歴史の町」大須賀町には、こうした秘められた歴史の姿のあることが、今回の調査においても明らかにされたわけあります。これらの貴重な史実を単に古い歴史的郷愁としてではなく、大須賀町の未来像を造る糧とすることができれば幸であると思います。

今回の調査では、清ヶ谷古窯跡群の調査をはじめとして、大須賀町の埋蔵文化財研究に常々ご指導をいただいている市原壽文先生（静岡大学人文学部教授）に引き続きご尽力いただきました。また、柴田 稔先生（日本考古学协会会员）には、現地で作業を指導していただくとともに報告書作成をお願いいたしました。

本書の発刊にあたり、調査費の負担や現場作業に格別の便宜をはかっていただいた鈴木自動車工業株式会社、さらに調査、作業調整にご指導ご助言をいただいた静岡県教育委員会文化課の諸先生方、また作業に当ってくださったみなさん、ならびに関係各位に対しまして、厚く感謝の意を表するだいります。

昭和60年3月

大須賀町教育委員会

教育長 伊藤 正一郎

例　　言

1. 本書は、静岡県小笠郡大須賀町西大渕の鈴木自動車工業株式会社大須賀工場の工場拡張工事に伴う埋蔵文化財の調査報告書である。
2. 調査は、遺跡確認調査と一部本格調査とに分けて行い、前者は1984年5月21日から7月5日まであり、後者は、1984年7月23日から9月21日までである。
3. 調査費用は、鈴木自動車工業株式会社が負担した。
4. 調査体制は下記の通りである。

調査主体者 小笠郡大須賀町教育委員会 教育長 伊藤正一郎

調査担当者 市原壽文（静岡大学人文学部教授）柴田 稔（日本考古学协会会员）

事務担当 小笠郡大須賀町教育委員会事務局長杉山平一、社会教育主事松本すが子

5. 資料の整理、本書の執筆は、市原の指導で柴田が行った。
6. 出土遺物中の陶磁器は、愛知県陶磁資料館の柴垣勇夫氏、仲野泰裕氏の鑑定を得た。かかる遺物の文章化は柴田が行っているため、誤記その他の責は柴田にある。
7. 調査に当っては、大須賀町文化財保護審議会委員長 泉 敬常氏をはじめとして、同委員会委員の諸氏の御指導、御協力を得た。また、鈴木自動車工業(株)の小林恒雄氏、山村一郎氏、峯 定治氏からは、職務を越えた御協力を得た。記して謝意を表したい。また資料の収集などにも各氏からの御援助を得たが、御芳名を記して感謝の意を表したい。
柴田静夫、栗原雅也、足立順司、桑原繁敏、中曾根真南、増田 實（順不同敬称略）
8. 挿図中の断面図水平を示す実線下の数字は、海拔高（単位cm）を示している。

目 次

1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過	1
3. 周辺の位置および環境	2
1) 地理的環境	2
2) 歴史的環境	5
4. 確認調査の概要	13
1) 各トレンチの概要	13
3) まとめ	15
5. 本調査の概要	18
1) 各遺構の概要	18
2) 出土遺物の概要	21
6. まとめ	24

挿 図 目 次

第 1 図 位 置 図	3
第 2 図 確認調査トレンチ配置図	11
第 3 図 石垣および溝状遺構実測図	13
第 4 図 山路状遺構実測図	14
第 5 図 各トレンチ断面図	15
第 6 図 調査地点地形図	17
第 7 図 遺構完掘実測図	19
第 8 図 石垣状遺構平面図	20
第 9 図 各遺構断面図	21
第 10 図 出土陶器実測図	22

表 目 次

表 1 本多内膳助久の系譜	6
表 2 本多利長家譜	9
表 3 井戸ヶ谷遺跡出土遺物台帳	23

図版目次

- 図版 1 1) 井戸ヶ谷遺跡遠景(西側尾根上より)
2) 第2トレンチ溝状遺構と石垣
- 図版 2 1) 第3トレンチ土塁と石垣
2) 第4トレンチ石垣と崩落状況
- 図版 3 1) 本格調査地点全景(西側より)
2) 土塁、平坦部調査前(北側より)
- 図版 4 1) 土塁2調査状況(4、6、8区、北側より)
2) 平坦部、土塁1、土塁2調査状況(4~6区、北側より)
- 図版 5 1) 山路状遺構完掘状況(3区)
2) 土塁1、石垣、山路、溝状遺構調査状況(1、2、3区、東側より)
- 図版 6 1) 土塁1、石垣、溝状遺構調査状況(2区)
2) 溝状遺構内石垣崩落状況(2区)
- 図版 7 1) 白磁出土状況(3区)
2) 完掘状況(西側より)
- 図版 8 遺構内出土遺物
- 図版 9 同上
- 図版 10 遺構内出土遺物及び各種陶器
- 図版 11 各種陶器
- 図版 12 同上
- 図版 13 同上
- 図版 14 各種磁器
- 図版 15 同上
- 図版 16 同上

1. 調査に至る経過

鈴木自動車工業株式会社は、小笠郡大須賀町の大須賀工場の拡張を計画し、その北側に用地を取得した。工場関係者は、そこに埋蔵文化財が所在することは予測していなかったようである。事実、「静岡県埋蔵文化財分布地図」には、文化財の記載はない。しかし、これとは別に刊行された「静岡県の中世城館跡」には、工場拡張用地にあたる部分に「細ヶ谷城」の一ノ館跡が記載されていた。

大須賀町教育委員会は、この事実にもとづき周知の遺跡が存在するとして、鈴木自工(株)に対し、調査の必要性を指摘した。

しかし、細ヶ谷城は、歴史的記録にはまったくみられないものであり、外観から城としての構造にも若干の疑問が持たれていた。このため、ただちに全面調査なり保存なりの処置を要望することは避けて、遺跡の確認調査を行い、その結果にもとづいて再度検討することとした。

遺跡の確認調査は、市原壽文、柴田 稔が担当して行った。その結果、当地域が城跡でないことが判明した。

確認調査の内容は、第4章に記すが、北端側の一部に発掘調査を必要とする部分がみとめられたために、この部分に限って本格調査を行った。

2. 調査の経過

先に記したように、調査は確認調査と本格調査とに分けて行った。

確認調査は、1984年5月21日から同年7月5日まで行った。

調査の方法は、工場予定地内にある土塁、石垣、堀状の遺跡などを中心にしたトレンチ調査である。

この結果は、第4章の所見に示したが、用地の一部に限って本格調査の必要性をみとめた。

本格調査を実施しない地区においては、少なくとも現代の構築物とはいえない土塁などが存在している他、遺物も発見されていることから、本格調査に併行して再検討することとした。

本格調査は、1984年7月23日から同年9月21日まで行った。

この地区は、用地の北端部に当り、すでに大須賀アルミ工業株式会社用地として遺跡の大半が破壊されているといえ、他の地区のように、近世中葉以降に烟ないしはそれに類したものとして構築されたものではなく、場合によると中世末ごろにまでさかのぼりうる遺構が存在する可能性があった。このことは、先の細ヶ谷城跡を立証し得ることもある。

結果的にはこの地区も、近世中葉以降に構築されたもので、居館跡などを想定することは困難であることが判明した。

現地調査完了後から、資料整理を行い、1985年3月をもって報告書刊行となった。

3. 周辺の位置および環境

1) 地理的環境

大須賀町は、小笠山塊の西南麓から南麓にかけての丘陵とその前面に開ける低地帯からなり、遠州灘に面した町である。

小笠山の西南麓は、古磐田海の東端であり丘陵は徐々に低くなり沖積平野下に埋没している。しかし、当遺跡付近の南麓には急峻な海食崖がみられる。この崖は、縄文海進によって形成されたものであり、その前面に開ける幅2km程の沖積平野は、その後の海退に伴って形成されたものである。

この沖積平野は、小笠山から流れ出る西大谷川・東大谷川などの小河川が形成した扇状地、3列以上がみとめられる砂州と、これらの間にみられる低地帯からなっている。

小笠山西南麓には、近世に至るまで入江がみられ、その一部は横須賀港として利用されていた。事実、1886年(貞享3)の絵図には、現在の浅羽平野の奥深くまで入江がみられ、正徳年間の絵図には、横須賀城前面からその背後にかけて入江をみることができる。

縄文時代前期ごろをピークとする縄文海進は、小笠山丘陵を浸食し沖積平野との比高約40mの海食崖を形成したが、これと同時に海面下では砂州が発達していた。また、西大谷川、東大谷川などの河川から運ばれる土砂は扇状地をも形成していた。縄文海進時の海水準は、最高で今より数メートル高かったといわれているが、それに続く海退は、海面下に形成された砂州を陸地化するとともに、各河川の形成する扇状地を発達させた。

大須賀町でもっとも北側の砂州は、石津・横砂地区にみられるが、天王森、高室山などの砂丘もその基層は砂州であろう。

第1図にみられるように、西大谷川、東大谷川の扇状地は、逆三角形になり、西大谷地区、藤塚地区などとなっている。また、久世川なども小規模な扇状地を形成している。大須賀町でもっとも北側の砂州は、これらの扇状地と錯綜してみられ、この砂州の西方への延長である浅羽町梅山、松原のように単純な形ではとらえられない。

西大谷川、東大谷川の扇状地南端付近に、沖之須、雨垂などの大須賀町で北から2番目の砂州がみられる。この砂州は、浅羽町中新田、同笠、太郎助などの砂州へ連続している。

この北から2番目の砂州と先の扇状地によって南北約600m、東西約1500mの低地帯が形成されている。

西大谷地区の前面には以上のような地形がみられるが、これらの成立した時期はかならずしも明確にされてはいない。

大須賀町でもっとも北側にあたる砂州が、浅羽町梅山から松原へ続く一連の砂州であるとすれば、浅羽町梅山村前、松原宮西、松原宮ノ腰遺跡からは縄文時代の石器、剥片が採集されており、縄文時代中期以降の海退とともに陸地化したといえる。また、先の村前、宮西遺跡や松原権現山



第1図 位 置 図 (1:1万5千)

- 1. 井戸ヶ谷遺跡
- 2. スズキ自工用地
- 3. へいしうる屋敷(山廻屋敷跡?)
- 4. 釜ヶ谷窯跡
- 5. 樹木々谷奥窯跡
- 6. 樹木ヶ谷窯跡
- 7. 愛宕山横穴群
- 8. 川原町遺跡
- 9. 天王森遺跡
- 10. 野中遺跡

遺跡には弥生時代後期の集落も予測され、弥生時代後期ごろには定住が開始されたことが理解できる。

大須賀町内においても、天王森、野中^{のなか}遺跡などに弥生時代の集落が考えられ、ほぼ同様の所見が得られる。

これまでの浅羽町内の調査では、それらの遺跡が海浜に生産の場を求めたことは立証できず、稲作を中心とした農耕集落といえる。このことは、大須賀町内の遺跡であっても同様であろう。磐田市二之宮半僧坊貝塚のように、小規模な貝塚を営むことはあっても、これらの弥生集落は稲作が中心であったことには変りないであろう。

砂州上の弥生集落が稲作集落である以上、大淵地区の先の低地帯も弥生時代には湿地化した可耕地を持っていたといえる。とくに、稻が塩分に弱く、400 PPM以上の塩分濃度の水では害があることを考え合わせれば、この地は海水の侵入する場所ではなかったといえる。もちろん、低地帯の中央部などには池沼が存在し、塩水の侵入していたことまで否定するわけではない。

大須賀町でもっとも北側の砂州に弥生人が定住し、その前面の湿地帯を耕地としていた前提は、沖之須や雨垂の立地する北から2番目の砂州は、湿地帯を形成する要因であり、おのずから弥生時代には陸地化していたと考えなくてはならない。

天王森遺跡には、6～8世紀の遺物も多くみられ、古墳時代から奈良時代にかけても引き続き集落が営まれていたようである。

平安時代には、平安海進ともよばれることのある小海進が全国的にみられる。浅羽町松原権現山、宮ノ腰遺跡では、海拔1.3m前後に奈良時代の遺構底面みられたが、この地点からは平安時代の遺物は採集できず、平安海進を予測させる。しかし、13世紀代には再び集落が営まれている。

天王森遺跡からは、平安時代の遺物も採集されており、浅羽町内の先の遺跡よりもさらに安定した場所であったと考えられる。

浅羽町内の海岸平野に立地する多くの遺跡は、鎌倉時代から室町時代のはじめごろに終焉を迎える。これは、これまでの散村形態から集村形態へと変化してゆくことに原因があると考えられるが、同様なことは大須賀町においてもいい得ることであろう。

以上のように、浅羽平野での考古学的知見にもとづいて、大須賀町内を考えてみたが、この結果、西大谷の前面に開ける低地帯は、一部が池沼であり、深田の多いことは事実であっても、横須賀城前面から背後にみられるような入江ではなかったことが理解できるであろう。

近世において、横須賀城の眼下にまで海水が侵入していたという事実は、そこから「推して知るべし」という論法で、原始・古代には海岸平野の多くは当然海であったという理解をされ、郷土史家の多くもそれを語ってきた。このことは、海岸平野地帯の原始・古代史を大きく見誤る原因であったばかりか、中・近世史にまで影響を及ぼしている。

当遺跡の報告を行うにあたり、以上のような地理的環境を指摘しておく。

2) 歴史的環境

大須賀町には、^{ヨシタ}小谷田、^{ヨシタ}愛宕山遺跡などの縄文時代の遺物を出土する遺跡が知られている。また、弥生時代から古墳時代の遺跡も少なくない。

しかし、大須賀町を考古学的にみた場合、奈良時代、平安時代の窯業生産跡が特に注目できる。^{ヨウセイテイ}竜天瓦窯は、奈良時代の遠江国分寺瓦の生産を行っており、国分寺創建時の瓦窯である。五郎右衛門窯からは、須恵器、須恵馬の他、素弁蓮花文瓦も発見されている。また、^{アツ}水ヶ谷奥古窯は、獸足、須恵馬、須恵人形、円面鏡、へら描文字を持つ須恵器などを出土し、奈良時代における有力な窯跡である。

平安時代後期から鎌倉時代初期の、^{セイ}清ヶ谷古窯跡群などでの灰釉陶器の窯跡は、その規模や分布が十分に把握されているとはいえないが、白山窯跡の調査における分布調査以来、徐々に明確化している。おそらく、静岡県内にあっては、島田市旗指古窯跡群とならぶ有数の規模を持つものであろう。

西大谷地区には、釜ヶ谷窯跡が知られている。この古窯の生産時期の中心は、12世紀初めごろであろうが、灰釉を施した碗や、瓦なども発見されている。「横須賀原始考」（以後『原始考』と略す。）によると、「釜ヶ谷と言ふも昔磁器つくり住みて焼物をつくりけるとなん、されば釜ヶ谷とは言ふなり、今も陸田の畠等柴焼のこぼれそここに見ゆるなり、……」と記されている。本書は、「時に文化十三年神無月時雨の夜、東都の偏居にしるす」と結ばれており、その後写本における誤記や挿入はあるとしても大略は19世紀初頭に書かれたものである。当記事が、大須賀町の窯跡の存在を記した最初のものであろう。

和名類集抄には、城飼郡松淵郷がみられる。この郷は、大須賀町大淵辺と考えられることが多い。^{ヨウ}松淵がどのような経過で大淵という地名に変化したかは今後の課題であるが、先に自然環境で指摘したように、西大谷地区の前面に、大きな灘が存在したことは事実であり、天王森、川原町、野中の各遺跡が奈良時代にも営まれていた事実もみられる。

このような原始以来の環境は、中世から近世にかけて大きく変化し、城下町横須賀の成立とともに、横須賀城なくしては歴史を語ることのできない土地となっていました。

横須賀城に関しては、「横須賀城跡調査報告書」などで知ることができ、その歴史的位置づけは着々と進んでいる。したがって、ここにおいては多くを指摘することを避け、西大谷地区における歴史として、本多内膳助久に関する点と、千手山明応院普門寺とこれに関連して西大谷の開発に関する点を記すこととした。これらは、16世紀末から18世紀の内容であるが、当遺跡の主な部分が近世に当たるためであることはいうまでもない。

表1 本多内膳助久の系譜 (※寛政重修諸家譜。武鑑)

年号	姓名	諸事	石高	機須賀城主
1645 正保 2	本多助久 (帯刀) (内膳) (彦八郎)	※ 4560 石を賜わる。 ※ 采地(知行地)を城東郡に移される。 ※ 采地にゆくことを願い出、ゆるされる。 ※ 利長とともに久能山の普請をたすける。	※ 4560	本多越前守利長
1663 寛文 3		※ 新居関所番となる。		
1669 ※ 9		※ 助久没、年54才		
1682 天和 2	本多利重 (彦十郎)	※ 遺跡を繼ぎ 4260 石余を知行し、 300石を弟卯之助利久に分ち与える。	※ 4260	西尾隱岐守忠成
1688 貞享 5		※ 書院番頭となる。		
1696 元禄 8		※ 新番頭となる。		
1704 宝永 1		※ 内藤式部輔正友の大坂の定番となるに より、かの地におもむきおおせつかる。 ※ 没 年47才		
1707 ※ 4	本多助孝 (万之助)	○ 寄合衆となる。	○ 4500	西尾隱岐守忠尚
1713 正徳 3				
1732 享保 17	本多紀智 (弥十郎)	○ 家を繼ぐ。 ※ 助孝没	○ 4500	
1734 ※ 19		○ 火事場見廻となる。		
1737 元文 2	(主殿)	○ 使番となる。		
1739 ※ 4	(内膳)	○ 目付となる。		
1741 ※ 6	(大学)	※ 新番頭となる。		
1745 延享 2	(日向守)	※ 小普請組支配となる。		
1749 寛延 2		○ 小姓組番頭に進む。		
1753 宝曆 3		○ 従五位下日向守に叙任する。		
1756 ※ 6		○ 書院番頭に転ず。		
1760 明和 2	本多助友 (大学)	○ 家を繼ぐ。	○ 4260	西尾主水正忠需
1766 ※ 3	(又太郎)	○ 寄合衆となる。		
1767 ※ 4	・養子	○ 火事場見廻となる。 ○ 城東郡の采地を樺原及び伊豆君沢郡 に移さる。 ○ 持筒頭となる。(諸家譜では定火消		

年号	姓名	諸事	石高	横須賀城主
1773 安永 2		とある。) ◦ 務を辞す。 ◦ 寄合衆となる。 ※ 助友没 年49才		西尾隱岐守忠移
1782 天明 2				
1783 " 4				
1784 " 5 本多助阜 寛政 6 (千八郎)	^{ひさ} 本多助詮	◦ 寄合衆となる。 ◦ 小納戸となる。 ◦ 小姓となる。	° 4260	
1795 " 7				
1796 " 8 本多助詮 (末吉 (大学 ・妻子	^{あさな} 本多助詮 (末吉 (大学 ・妻子	◦ 家を繼ぐ。 ◦ 寄合衆となる。 ※ 助阜没 年25	° 4260	西尾隱岐守忠善
1801 享和 1				
1813 文化 10 本多				
1825 文政 8 (六郎				
1828 " 11				
1829 " 12				
1837 天保 7				
1839 " 10				
		◦ 寄合衆となる。 ◦ 火事場見廻となる。 ◦ 定火消となる。 ◦ 百人組頭となる。 ◦ 記載なし。	° 4260	西尾隱岐守忠固

A) 本多内膳助久について

『横須賀三社権現鎮座本起并御城主御代々』（以後『三社本起』と略す）には、次のような記事がみられる。

本多利長の「……別腹の舍兄本多内膳西大谷不動下に屋敷を立駿府の番に切々勤めらる、知行五千石郡中にあり、同腹の舍弟井上兵庫頭知行二千石定在府也。」

これは、本多利長が横須賀城主であった時期の記事であるが、この点について、『寛政重修諸家譜』において確認してみた。これによると、本多内膳は、名を助久といい、三河岡崎城主本多忠利の長男であるが、庶子であったため、家督は、井上正就の女を母とする利長が継ぎ、助久は、4560余石を分け与えられて家を興している。そして、正保2年知行地に移り住み、利長とともに久能山の普請に参画している。また、井上兵庫頭は、名を利朗とよび、利長の実弟で2000石を与えられている。はじめは、本多を称したが、のち母方の井上姓となり、その子利好の時期から再度本多姓となっていることがわかる。このようにみると、『寛政重修諸家譜』の内容は、『三社本起』の記事とはほぼ一致している。『寛政重修諸家譜』の内容は、『武鑑』ともほぼ一致しており、その点からも『三社本起』の記事はほぼ正しいといえるであろう。

『寛政重修諸家譜』に記載されず、『三社本起』にみられるのが、西大谷不動下に屋敷を建てた記事である。西大谷は、利長の領地であり、助久の知行地は、主に菊川の流域である。したがって、助久の屋敷は、知行地外にあったとしなくてはならないが、これは、利長と助久との関係をみれば理解しうる内容であろう。

『横須賀根元歴代明鑑』（以後『歴代明鑑』と略す）¹⁵にも類似した記事がみられるが、『三社本起』は、『寛政重修諸家譜』に先行する可能性が高く、かならずしも作られた内容とはいえない。

『三社本起』にしたがった場合、助久の屋敷は、1645年（正保2）から、新居関所番となる1663年（寛文3）ごろまでは西大谷不動下にあったとできる。

西大谷不動下という場所は、現在では忘れられた地名であるが、『三社本起』には、「円福庵は本町の惣庵にて一番町に在し寺也、替地は不動下河原のはたにて一反余……。」とある。この場所はあまりよくないので、実際には正法寺跡に建てられたようであるが、この正法寺跡とは、現在の大谷町内であろう。この記事は、11代城主井上河内守正利による城下の整備に伴う移転を記したものであり、この時期に西大谷の入口に当る新屋町、十六軒町、川原町ができており、不動下は、これより北側で、西大谷川の流れる谷と考えることができる。

普門寺文書には、1620年（元和6）に普門寺中之坊門前より南の山を不動天神建立のために寄進するという内容がみられる。また、正徳年間の絵図には、普門寺門前から南側の山に2つの堂がみられる。

これらの記事を参考にすると、大谷町以北、普門寺以南に不動下と呼ばれる部分があったと考えができる。ただし、正徳年間の絵図には、本多内膳の屋敷はみられない。

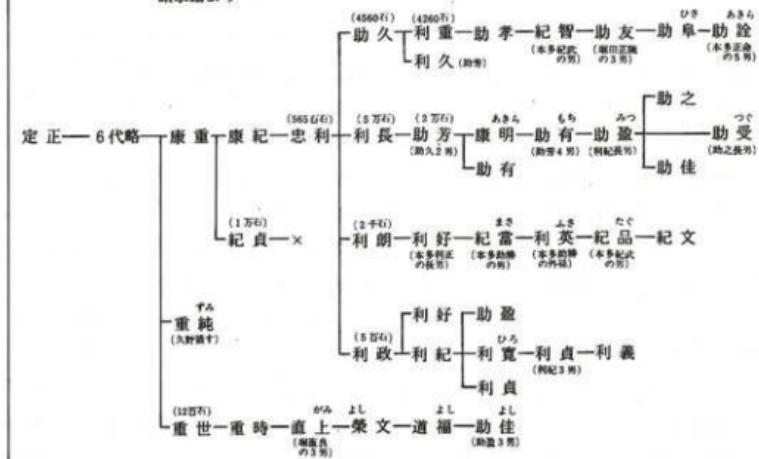
不動下を先の範囲に限定すると、この地区に「へいしうる屋敷」と呼ばれている場所がある。これは、調練橋の北側付近で、普門寺門前に続く道路の東側に当る。正徳年間の繪図では、ここに山廻屋敷と書かれており、「へいしうる屋敷」とは、このことを指すのであろうが、その前身が本多内膳の屋敷であった可能性は高い。

助久が知行地に帰ったことは、『寛政重修諸家譜』で知ることができたが、その助久が一時期西大谷に居住した可能性はきわめて大きいといえる。

なお、本多助久の後継者は、江戸小石川に住み旗本として活躍している。このことは表に示したが、助久の子利重の弟卯之助は、利久といい、元禄元年に利長の養子となり、封地は越後国糸魚川に移り、さらに信濃国飯山城主となり、名も助芳と改めた。

表 2 本多利長家譜

諸家譜より



B) 近世普門寺

当寺は、大正時代には等外一級³³の寺格を持ち、静岡県内の天台宗寺院中の最高の格にある。寺伝によれば行基の創建とされ、1177年（治承1）に平重盛が再興したとされているが証明する資料はない。『静岡県資料4』には、1574（天正2）～1699年（元禄12）までの文書17点が所収されている。また、「三社本起」などにも記事が散見できる。

普門寺には、西大瀬村内に37石の朱印地があり、横須賀藩内では、撰要寺の60石に次ぐものである。⁶⁶ 37石の内容は、1581年（天正9）に大須賀康高寄進の20石と、1647年（正保4）の本多利長書状中にみられる坊跡17石である。

康高寄進の20石は、同年の高天神城攻略に功績があったことからのもので、この文中に「右古

跡云。……。其外古之坊跡山屋舗如前々進置候……。」 という記事もみられる。これが後の利長書状へと発展するわけであるが、普門寺はこの時、千手峯に観音堂があって、院坊が西大谷の隅々まであったという伝承を、全面的に認められたと考えてよいであろう。

高天神城が武田方に陥落した1574年(天正2)から徳川方が奪取した1581年(天正9)の間の記録をみると、1574年の普門寺再興、同三熊野神社再建、1578年(天正6)の横須賀城普請開始をはじめとし、久世三四郎の三熊野神社代参など、横須賀地内は騒然たる様相を呈している。高天神城陥落によって、横須賀は南遠地方における徳川方の最前線となり、そこに人を集め城を築く作業は、高天神城奪還を目指す家康の作戦に他ならぬものであり、このなかに普門寺が登場しているところに近世の普門寺が位置づけられよう。

高天神城に対して築城の開始された横須賀城にとっては、北東の門として普門寺が位置づけられるといえるからである。そして、その結果が高天神城奪還の功績として与えられた朱印地20石である。

康高寄進の20石とは別に利長の時代にみられる坊跡の17石は興味深い。康高判物にみられる古之坊跡云々がこれに当るとみてよいであろうが、坊跡の石高が17石であったことになる。この坊跡は、後にあげる資料などから畠であったと考えられる。畠であったとすると、見付宿の牛原畠の石盛を参考にすると次のような数字が得られる。

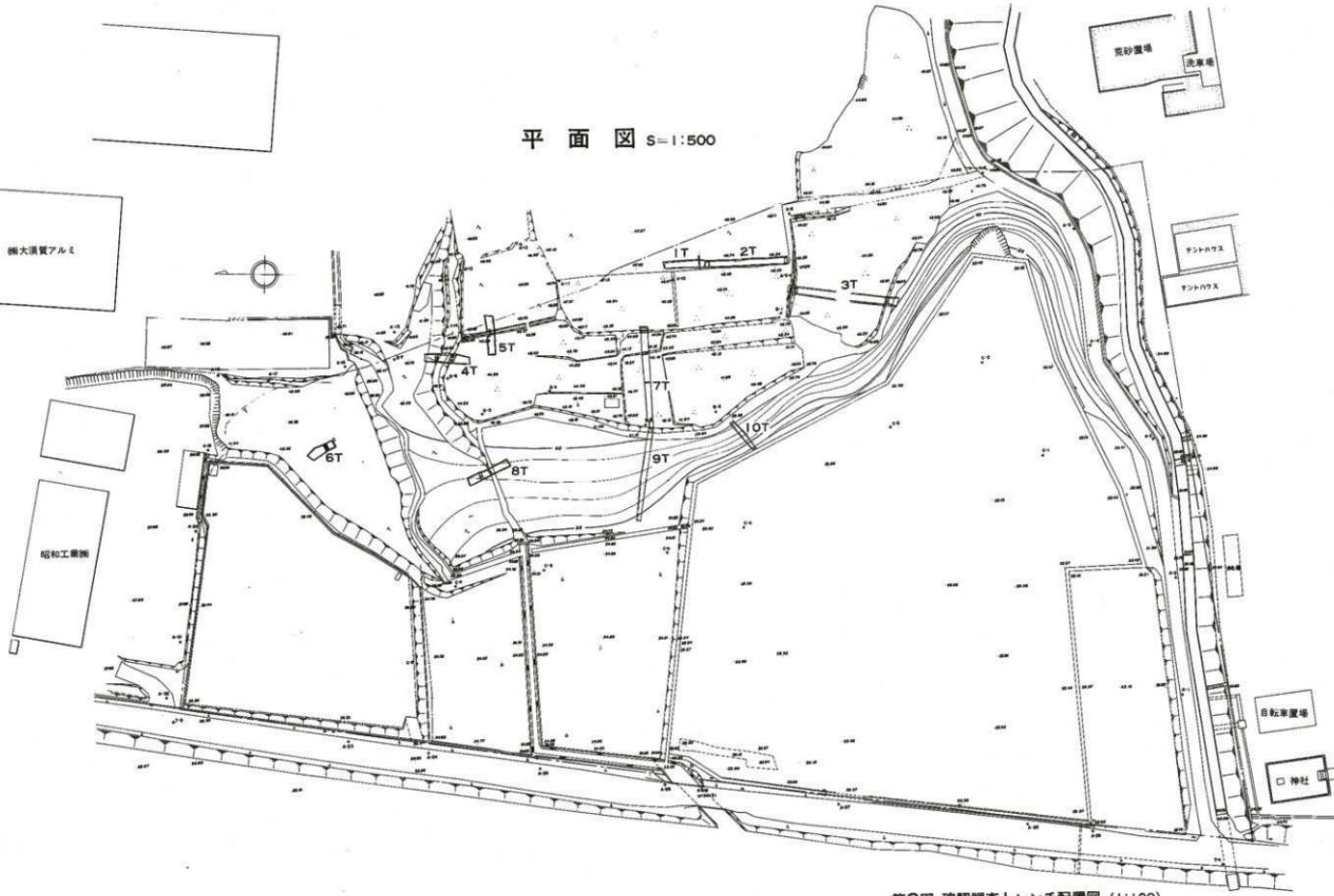
上畠であった場合、石盛は1反歩につき7斗であるから、17石は24反分に当る。また、下畠であったとすれば石盛は4斗であるから42.5反である。したがって、坊跡は、2~4町歩にも及ぶことになる。このすべてを坊の建物が存在した跡とは考えられないが、寺域として石盛の対象となつた土地がこの程度存在したことは考えてよいであろう。この点は、普門寺に荒地を開発する大きな能力があったという解釈につながるものであるが、西大谷の開発あるいは農地の記事は他にもみることができる。

1613年(慶長18)には、武藤万久らの手形において、5反の茶畠が存在することが知られ、同じく武藤万久の手形によって、古本堂跡から観密坊跡までを開墾し、5反歩は山の奥ではあるが、油草(菜種であろう)を作るようという記事もみられる。万久は、他にも新切3反歩を寄進している。また、松平重勝は、1620年(元和6)に西大谷の河原畠5反歩を寄進している。

これが、利長書状の坊跡に当るのかそれ以外のものは別として、すでに正保年間には、西大谷には多くの畠が存在し、茶、菜種などの栽培が行われていたことが理解できる。

これら普門寺関連資料からみた西大谷地区の農業開発とは別に、釜ヶ谷には、「陸田の開」が1816年(文化13)ごろ以前に存在していたことも『原始考』から知ることができる。この「陸田の開」は、釜ヶ谷窓跡の位置から平坦地ではなく、尾根の斜面を畠地化しているものであり、小笠山塊の山裾が畠地化した時期の古さを知ることができる。

平面図 S=1:500



第2図 確認調査トレーンチ配置図 (1:100)

東海サービスコンサルタント作成

4. 確認調査の概要

確認調査は、周辺の踏査、この地域の伝承の収集、およびトレンチ発掘である。

周辺の踏査では、第4、8トレンチを設定した山路状遺構のある谷奥で、円礫積みの丸井戸を確認した他、各所で土壘、石垣などを確認し、今回の調査対象外地区にも同様の遺構が連続していることが理解できた。

伝承の収集では、西大淵地区の多くの人達からこの付近を「とのさまがこい」とよんでいることを確認したが、その根拠を知ることはできなかった。しかし、1名だけ、この地域がかつて嚴様の薬草園であったと誰かに聞いたことがあると話していた。この点については、他の人達はまったく知らず、文献も見つけることはできなかった。井戸跡についての伝承も探してみたが、その存在すら知らない人が大半であり、それを利用した伝承もまったく残ってはいなかった。しかし、この地が湧水が多く、水不足の時に谷水を利用した話は残っていた。

その他に、普門寺の伝承、普門寺の山号である千手峯の伝承なども収集したが、『原始考』『歴代明鑑』などに記されているものと同様であった。

1) 各トレンチの概要

第1・2トレンチ 幅2m、長さ32m。

北側から約9mの所に石垣があり、この石垣から北を第1、南を第2トレンチとした。

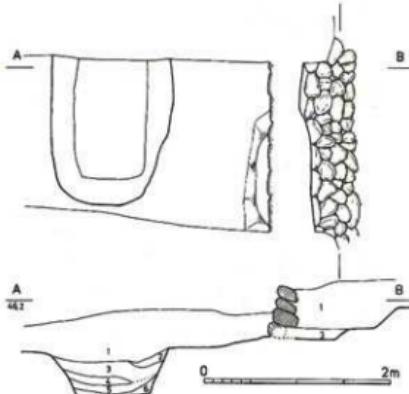
石垣背後の1層は耕作土、3層は若干黒味をもっている。

石垣から南へ約1mの所に、幅約1.2m、深さ約0.5mの溝あるいは土坑状の遺構がみられる。内部は自然堆積をしており、1層とは完全に違っている。内部からは18~19世紀の陶磁器が少量出土している。

1層からは、江戸前期以後の陶磁器、かわらけが比較的多く出土した。また、よせ瓦と思われる布目瓦片が1点出土した。

溝状遺構は、断面でみるとかぎり1層より古いが、出土遺物からはその古さを指摘できない。石垣は、1層より古いことはないと思われる。

第3トレンチ 幅2m、長さ29m。北側に土壘、南端に犬走り状の段がある。第5図



第3図 石垣および溝状遺構実測図

土層図 1. 表土および擾乱層 2. 淡黄褐色砂礫泥 3. 褐色砂泥
4. 黄褐色粗砂礫泥 5. 褐色砂泥(黄褐色粗砂混り)
6. 淡黄褐色砂礫泥

(確認調査 第1.2トレンチ)

中段の断面図でみられ
るよう、地山に約0.7

$\frac{m}{2.4}$

mの段があり、土壘は
この上に築かれている。

土壘北側には石垣がみ
られる。石垣は、地山
に密着していない。

1層からは、江戸中
期以降の陶磁器、かわ
らけが出土している。

土壘は、段より後に
できたものと考えられ
るが、段も江戸前期よ
り古いことはない。

第4トレンチ 幅2
m、長さ12m。第4図
にもみられるように現
状でも大きな段があり、

第8トレンチの空掘状
の遺構から連続してい
る。

地山削り出しの段は、約1.4mあり、これによって幅約3.2mの平坦面が得られている。段下
部には石垣がみられるがほとんど崩落している。

崩落した石垣上面から江戸中期のすり鉢片1点が出土した。

第5トレンチ 幅2m、長さ10m。中央部に土壘がある。土壘下には、約0.2mの段と、幅0.6
m、深さ0.4mの溝がみられる。

溝内、土壘からは遺物は採集できなかったが、1層からは、少量の江戸前期以降の遺物を出土
している。

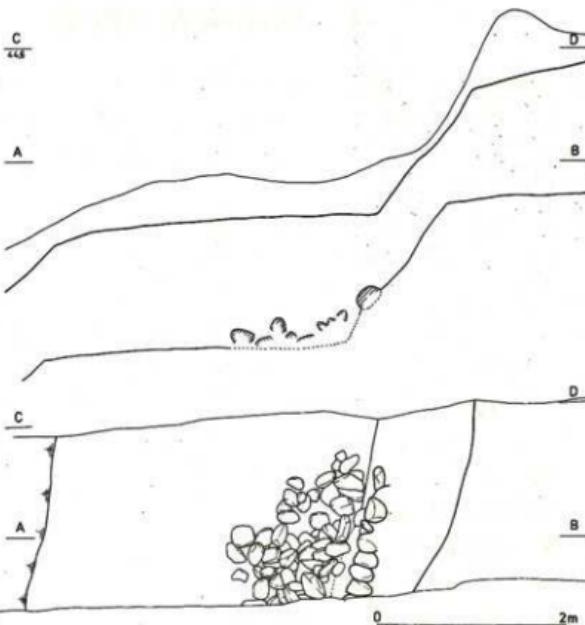
第6トレンチ 幅2m、長さ7m。5章に精細を示した。

土壘内から常滑系の壺片、崩落した石垣内から常滑系の片口鉢片、内耳鍋が出土した。

第7トレンチ 幅2m、長さ25m。段の状態を調査するために設定したトレンチ。

自然傾斜を整地した平坦部と段部とに分けた状態は確認できたが、注意すべき遺構は発見でき
なかつた。

1層からは、江戸前期以降の陶磁器、かわらけの他、寛永通宝1点が出土した。

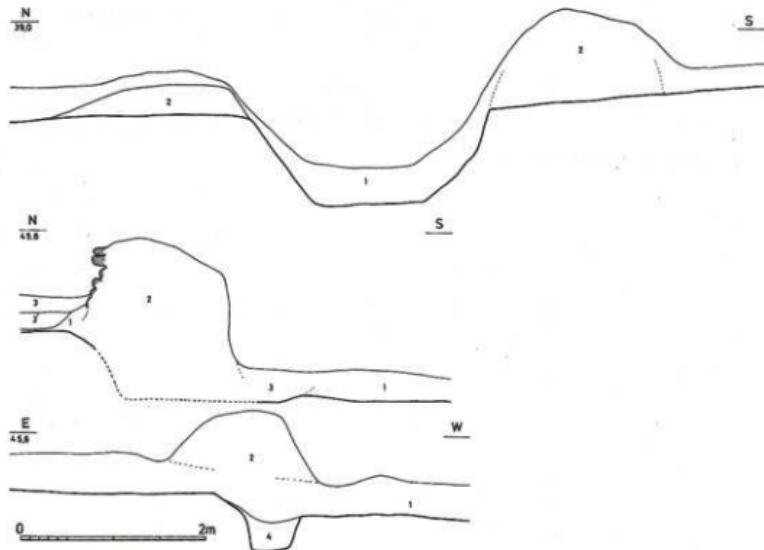


第4図 山路状遺構実測図（確認調査第4トレンチ）

第8トレンチ 幅2m、長さ12m。第5図上段の断面図にみられるように、現状でも両側に土塁をもつ空堀状の遺構が確認できる。この空堀状の遺構を登ると第4トレンチに至ることができる。土塁内を含めて遺物は採集できなかった。

第9トレンチ 幅2m、長さ26m。斜面の状態を調査するため設定した。ごく一般的な斜面堆積を示しており、遺物はまったく発見できなかった。

第10トレンチ 幅2m、長さ9m。第9トレンチと同じ目的で設定した。状況は、第9トレンチと同様である。



第5図 各トレンチ断面図

上 第8トレンチ 中 第3トレンチ 下 第5トレンチ

土層名 1.表土および耕作土 2.土塁盛土 3.廃植土 4.褐色砂礫泥(含炭化物)

2) まとめ

確認調査の結果では、中世の城館跡であることを証明する資料は得られなかったが、用地内は大きく3つに分けて考えることができる。

A) 1~3、5、7、9、10トレンチを設定した範囲。土塁、石垣、犬走りなどの遺構あるいはこれに類似した遺構がみられ、ごく一部を除外すると江戸時代前期を上限とした遺物が発見された。しかし、城館跡、屋敷跡を立証する資料は得られなかった。

B) 4、8トレンチを設定した部分。空堀、土塁、山路、石垣などの遺構、あるいはこれに類似した遺構があり、遺物はほとんど発見できない。これらの遺構は、谷奥の井戸跡に通じる路跡

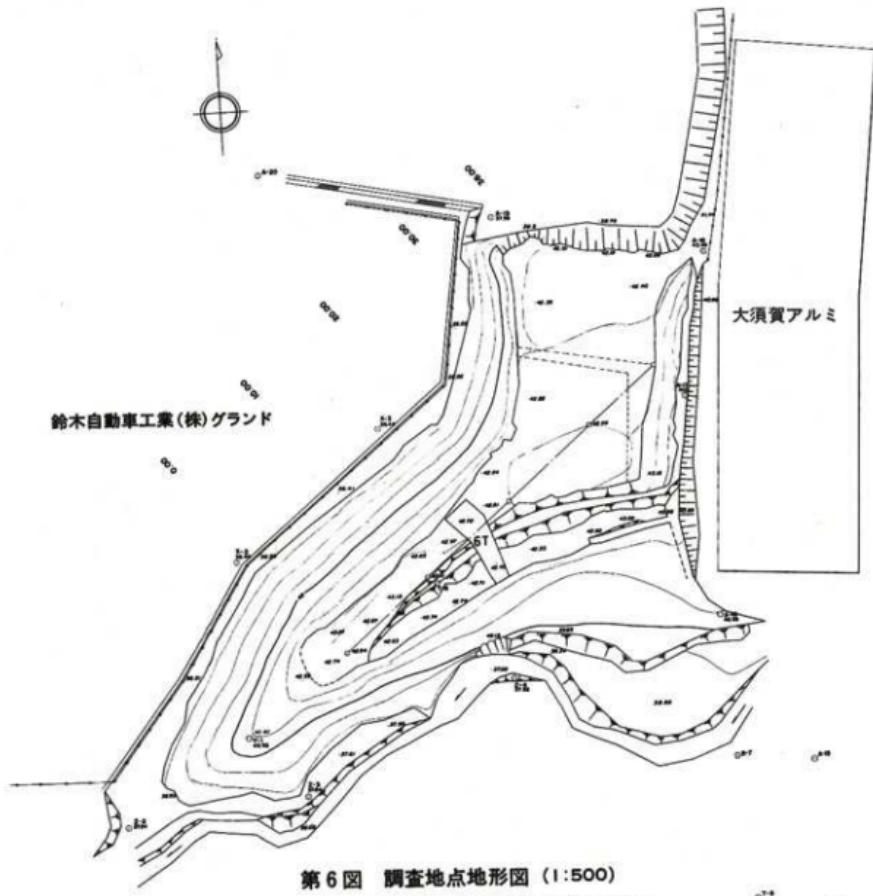
と考えるのが妥当であるが、その上限を知ることはできなかった。

C) 第6トレーナーを設定した用地北端の山林。土壘、石垣、山路状の遺構があり、土壘内、崩落した石垣内出土遺物は15世紀までさかのぼり得る。遺構の性格は不明であるが、城館跡を想定した場合には、この地点は手がかりとなり得る。

以上の状況から、当用地内は、江戸時代前期以降に大きな人為性がみとめられ、一部は中世末にさかのぼる可能性がある。しかし、当初予測された中世の城館跡の可能性を指摘しうる資料は少なく、基本的には近世の遺構であるとしなくてはならない。近世の遺構であるという前提に立った場合、可能性の範囲のなかでは各種の遺構を考えることもできるが、どれをも積極的に立証することはできない。

このような観点から、現時点において当遺跡を全面発掘の対象とすることには疑問が多い。当面は、第6トレーナーの所見にもとづき、用地北端部の調査を行い、その内容によって残りの地点の取扱いを再検討すべきであろう。

平面図 S=1:250



第6図 調査地点地形図 (1:500)

東海サービスコンサルタント作成

5. 本調査の概要

本格調査は、確認調査の結果にもとづいて、第6トレンチを設定した工場用地北端部に対して行った。この調査は、確認調査において不確実であった所見を補足する意味ももっており、この結果によっては第1～第8トレンチを設定した部分が再び調査対象となることもあり得た。

1) 各遺構の概要

調査した遺構は、主に土壘であるが、これと関連して石垣状遺構、溝状遺構、山路状遺構がある。また、きわめて不明確であるが小穴が発見されている。

A) 土壘とこれに付随する遺構

用地西側から尾根の稜線にそって弓状に延びる土壘1と、これに直交する土壘2がある。

土壘1は、広い部分で幅約3mで、西から東に向って少しづつ高さを増してゆき、N20ライン付近では、南側からの高さ約0.9m、北側からの高さ約0.6mである。第7・8図、第9図A-B、C-Dセクションにみられるように、N6ライン付近からN18ライン付近までは南側に幅約0.7m、深さ約0.2mの溝状遺構を伴い、その南側に幅約1.5m山路状の平坦部がみられる。N20ライン以東では、先の溝状遺構はみられず、幅約2mの山路状遺構が伴っている。

溝状遺構内には多量の円礫がみられるが、A-Bセクションや、第8図のN13ラインからN19ライン付近にみられるように、本来はきわめて粗雑な石垣あるいは土壘への貼石があったようである。

A-B、C-Dセクションにみられるように、土壘が築かれる以前に若干の整地および溝の掘削が行われており、山路状の遺構もこの時に作られた可能性が高い。

土壘に使用された土は、付近の地山とまったく同一のものであり、盤築などはみられない。また、土壘内および崩落したと思われる礫群中からは、15～18世紀の陶磁器が少量発見されている。

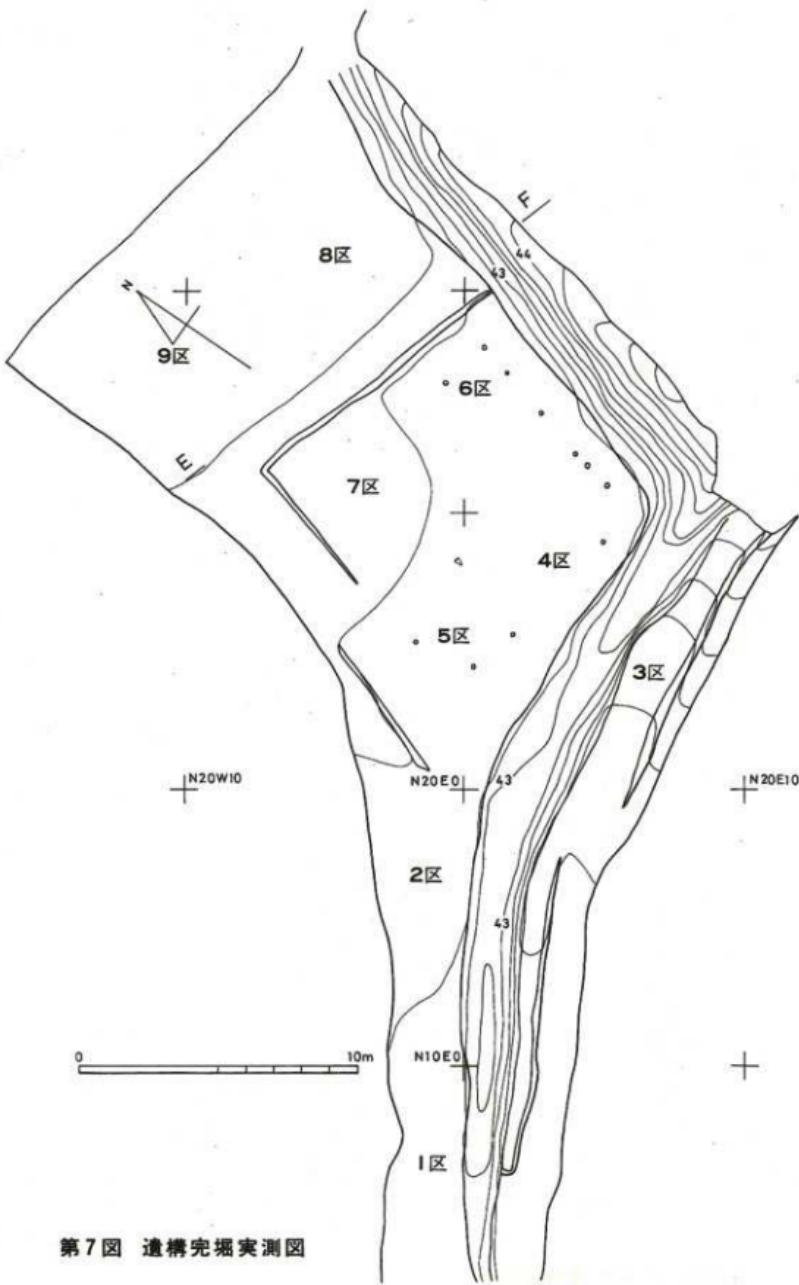
土壘1に対し、貼石ないしは石垣は同時期ないしは遅れて構築されたものであり、山路状遺構溝状遺構は先行して構築されている。しかし、溝状遺構内への礫の堆積状況をみると、礫は底面に密着し、山路状遺構にはまったくみられない。また、溝状遺構のみられない東半では、山路状遺構に密着しており、土壘を含めた4者は、ほぼ同時に構築されたとみてよいであろう。

土壘2は、土壘1に対し約90°の角度をもっているが、土壘1が徐々に高くなりながら土壘2とのギャップをもたないで続くことから、基本的には連続するものであろう。

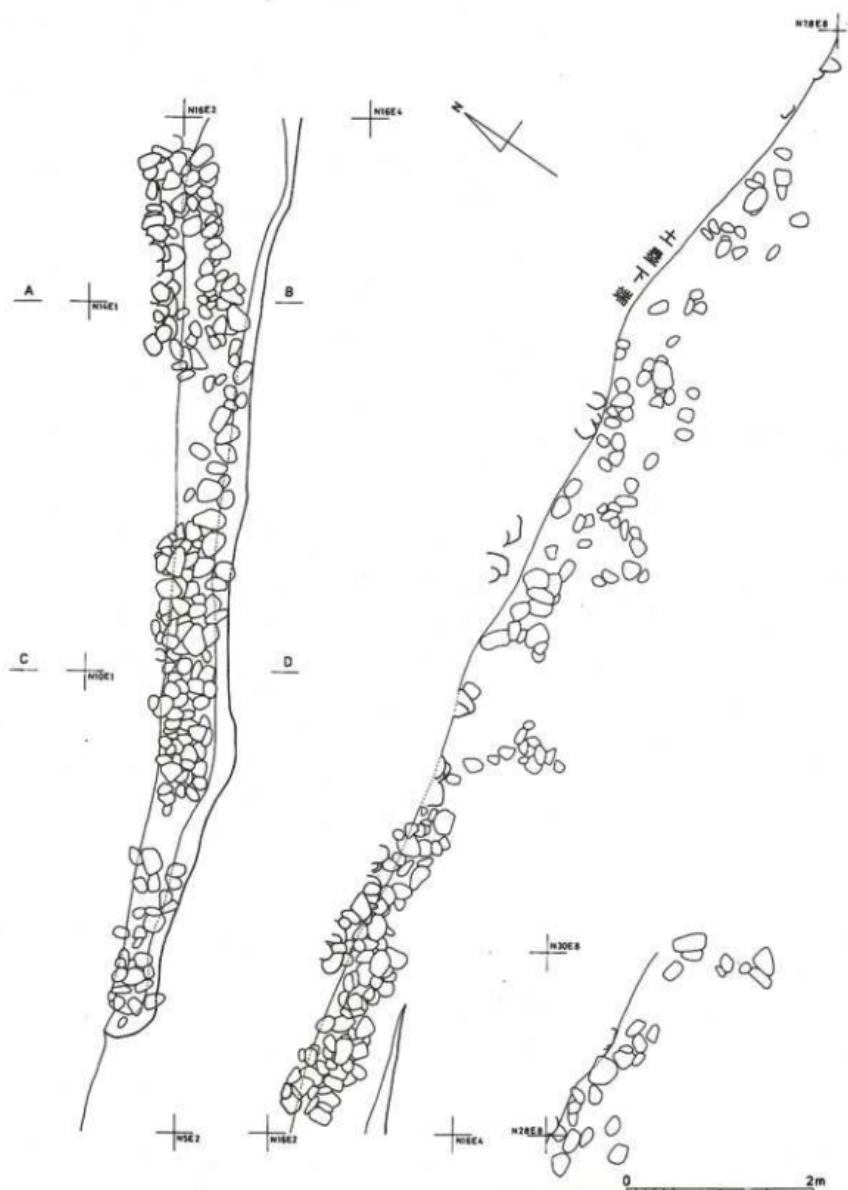
東側半分を削平されているが、西側平坦面から最高で約2.5mの高さをもち、北に進むにしたがって低くなり、コーナーから北へ約20m付近では、西側平坦面から約1mの高さである。

第9図E-Fセクションでは、土壘基底部は東に向って高くなっている、自然地形に即しているが、平坦面との関連からみれば整地されているといい得る。4層は多量に礫を含む層であり、5層は礫が少ない。3層は、本来の土壘の一部なのか崩落土なのか不明である。

4、5層から出土した遺物のみを土壘内出土としたが、土壘1と同様の遺物を出土している。



第7図 遺構完堀実測図



第8図 石垣状造構平面図

B) 平坦部

土壘と西側崖との間に平坦部がある。北側は、削平されているため確認できないが、特に土壘などはなかったようである。

平坦部南側に、約10m四方の若干高い部分がある。この範囲から第7図に示したように径10cm前後、深さ5~10cmの小穴が発見された。土壘などに伴うものか、後世の擾乱によるものか不明確であるが、柵状にめぐっているのは事実である。

C) 西側崖

第6図でみるよう、西側の崖は人為的ともいえた。このため斜面下部と、現状鈴木自工グランドとなっている埋立地をバックホーを用いて調査したが、特に遺構は確認できなかった。

2) 出土遺物の概要

出土遺物は、陶磁器、土師器がすべてである。

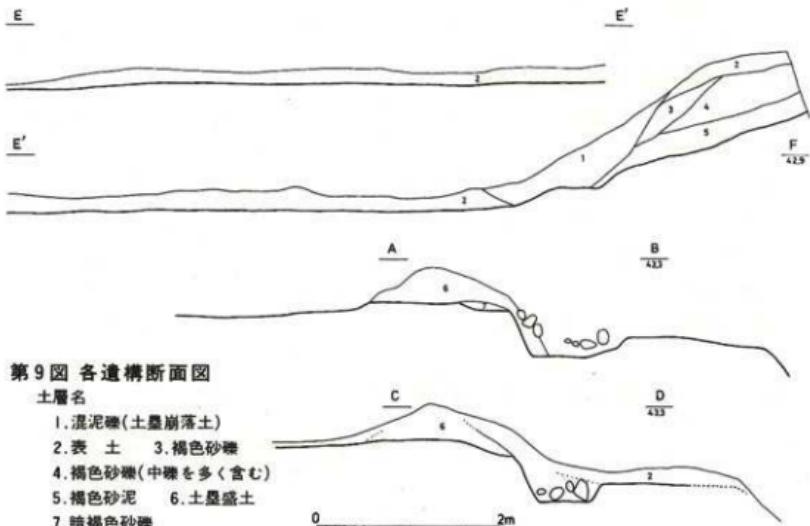
A) 陶器類

すべて小破片であるが、古瀬戸、常滑、唐津系、瀬戸・美濃系、京焼系、在地窯系のものがある。

器種には碗・皿・壺・擂鉢・片口鉢・香炉・水滴などである。

古瀬戸 破片総数でも6片程度である。細片ではあるが14世紀代の製品と考えられる。

常滑 確認調査第6トレンチ発見の3点は15世紀末から16世紀ごろの壺・片口であろう。また、擂鉢のなかに一部常滑焼が含まれている。



唐津系 いわゆる三島唐津系の細片、内面に灰釉をかけ外面は酸化銅の釉をかけた碗、内外面ともに酸化銅の釉をかけた碗などであるが、総破片数で約10片である。

刷毛目を用いた細片に16世紀代と考えられる1例がある他は、すべて18世紀代であろう。

瀬戸・美濃系 長石釉をかけた碗、これに綠釉をちらしたもの、灰釉の碗・皿・鉢、銅綠釉の碗、鉄釉をかけた壺・碗、天目茶碗、擂鉢、刷絵費盞などがある。

長石釉をかけたもの、灰釉の例などに16～17世紀の製品が含まれているが多くは18世紀の製品である。

もっとも多量に出土しているが、19世紀代の例はほとんどない。

京焼系 きわめて細片で数点発見されているが同一個体の可能性がある。

在地窯系 無釉の燈明皿、鉄釉の碗、灰釉の碗などは、18世紀代の志戸呂焼の可能性が高い。また、1例だけ19世紀前半と考えられる水ヶ谷焼がみられる。

B) 磁器

ほとんどが伊万里焼であるが、極少量の瀬戸焼がみられる。

伊万里 染付の碗・皿・壺、青磁・白磁の碗・皿・酒杯などがある。染付には、網手文、絵変り文、蔓草文、梅花文などがある。

染付の碗は、17世紀後半と考えられる例が2点あるが他はすべて18世紀代の例である。また白磁酒杯は、17世紀代であり、他の青磁・白磁は18世紀であろう。

瀬戸 19世紀代の瀬戸と考えられる細片が若干みられる。

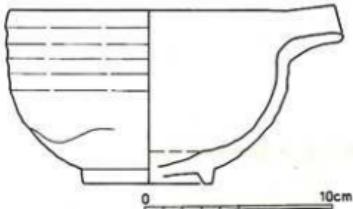
C) 土師器

内耳鍋・鉢などの細片であるが、時期を定めかねるものばかりである。

D) 土塁内および石垣出土の遺物

土塁内からは若干の遺物が出土している。とくに、土塁2のもっと高い部分からは比較的多量の土師器と擂鉢が出土している。

これらの遺物のうち、土塁1から出土した常滑は、14世紀ともいい得る。また、崩落した石垣からも15世紀末頃といい得る片口鉢が出土している。また、同じく崩落した石垣内から出土した伊万里焼白磁も17世紀代といい得る。しかし、美濃・瀬戸系鉄釉壺や、伊万里焼白磁碗は、18世紀代といわなくてはならない。擂鉢のなかには一部19世紀代といい得る例が含まれているが、混入遺物と考えたい。



第10図 出土陶器実測図（5区表土）
(瀬戸・美濃系、18C後)

表3 井戸ヶ谷遺跡出土遺物台帳

遺物番号	出土地点	出土層位 遺構	取上げ月日	備考	遺物番号	出土地点	出土層位 遺構	取上げ月日	備考
1	6 T	土壘内	0523		23	5区	褐色砂泥	0830	
2	"	石組内	"		24	4~7区断面帶		"	
3	4区	表土	0804		25	5~7区	"	0831	
4	"	"	0806	繩文土器?	26	8~9区	"	0901	
5	"	褐色砂泥	"		27	6区	土壘内上部	"	
6	"	"	0807		28	8~9区断面帶		0904	
7	"	"	0808		29	4区	土壘内	0905	
8	5区	表土	0809	大平鉢	30	"	"	0906	
9	"	"	0810	"	31	3区	"	0917	
10	7区	"	0811		32	2~3区	土壘内	0918	
11	6区	"	0817		33	1区	土壘内	"	
12	7区	褐色砂泥	0818		34	2区	"	"	
13	"	"	0820		35	3区	石組内		酒杯
14	6区	土壘崩落土	0822		36	1T	褐色砂泥	0522	
15	8区	表土	"		37	2T	"	"	
16	4区	"	"	取上げ遅れ	38	"	溝内	"	
17	8区	"	0823		39	6T	褐色砂泥	0523	
18	"	"	0824		40	3T	"	0524	
19	9区	"	"		41	4T	"	"	
20	8区	"	0825		42	5T	"	"	
21	9区	褐色砂泥	"		43	4T	縫上面	"	
22	"	"	0827	碁石	44	7T	褐色砂泥	"	

* 1~35の注記は、ナンバーの前にIDと記し、36以降は単にナンバーのみ。
 * 3~35は、本確調査の遺物。他は、確認調査の遺物。
 * 遺物に細片が多く、充分な注記ができなかったため、遺物取上げ台帳を整理して掲載した。

6. まとめ

例言で示したように、当遺跡は「井戸ヶ谷遺跡」と呼んだ。通称は、「とび細ヶ谷」と呼ばれ、広い意味では細ヶ谷に含まれており、井戸ヶ谷は、さらに北側に当る。したがって、本来ならば細ヶ谷遺跡と呼ぶべきであろうが、すでに細ヶ谷城跡という遺跡名がこの付近にあり、当地点もその一部に含まれていた。このため、城跡との混同を避けるために先の名称を用いた。

さて、以上において鈴木自工用地内の遺跡確認調査と一部の本確調査の結果を報告したが、この調査において、次のような事実を知ることができた。

1) 土壘などの構築時期

土壘1および土壘2内の出土遺物は、先に示したように15世紀末から18世紀代の陶磁器、土師器であった。これらの出土遺物のうち、もっとも新しいものは、瀬戸・美濃系鉄釉壺、伊万里系白磁碗などの18世紀代に属する資料であるから、土壘の構築時期は18世紀以降とすることができる。

しかし、平坦部から出土する18世紀代の遺物に比較すると同時期のものはきわめて少量であるのと、15~17世紀の資料は土壘内の方が比率的に多い点が指摘できる。このことは、土壘構築以前の15~17世紀の間にこの付近が小規模ではあるが何らかの目的で使用されていたことと、陶磁器が多量に投棄されたのは、土壘構築以後であったことを証明している。また、1例にすぎないが、4区表土から出土した白磁片(台帳番号04)と、明らかに土壘内から出土した白磁片(台帳番号31)とが接合できたことは、土壘構築以前にも18世紀代の陶磁器が投棄されはじめていたといえる。

したがって、これらを相対的に解釈すると土壘などの構築時期は18世紀代でも比較的早いころといえるのかも知れない。

確認調査における各遺構は明確に時期を指摘できる例が少ない。第2トレンチの溝状遺構内からは、19世紀前半の染付が出土しており、その構築時期は江戸時代後期ともいえる。その他の遺構は、直接的には指摘できない。しかし、平坦部出土の遺物は、明治時代の製品など新しい資料が多いことはいえても、17世紀以降の陶磁器も多く出土しており、それぞれの遺構も18世紀代には構築されていたといえよう。

2) 遺跡の性格

当遺跡は、18世紀代に現在観察できるような景観となったといえる。したがって、これらの遺構から中世の遺跡を考えるのは困難である。

しかし、中世の遺物が皆無というわけではなく、土壘などの遺構を除外し、きわめて自然地形に近い状況において中世の何らかの人為性を考えることは可能である。また、『歴代明鑑』では家康が三社山に陣し、勝頼が沖之須山に陣を取る攻防が記されており、当遺跡付近がその一部であった可能性などは否定するものではない。

さて、当遺跡が18世紀代に成立したとすれば、横須賀城主は西尾忠成以降である。第3章2節で記した本多利長や本多助久、あるいは普門寺の関連した資料はいずれも当遺跡成立以前である。したがって、西大谷地区の入口付近までは城下町が整備され、「へいしろう屋敷」付近には山番所が作られていた正徳年間の絵図にみられるような状況と、西大谷地区の農地化が進み、各所で山畠が耕作されていた様子とを合わせてみる景観を予想することができる。

これらのなかで、広大な範囲に土塁や山路を付けた当遺跡の成立を考える必要があろう。

この付近を「とのさまがこい」と俗称している事実から、ある種の屋敷跡を考えるとすれば、「安永七年戊三月三沢山より出火、西大谷山小笠御殿下迄焼る」(『歴代明鑑』)の記事を挙げることができる。

西大谷山小笠御殿をどのようなものと考えるかは別として、西大谷のどこかに御殿があったのかも知れない。

強いていうならば、この御殿跡をこの遺跡に当てることができるのかも知れないが、城下の絵図面などではみることができない。また、当遺跡付近の土塁群などは、広大な範囲に及んでおり横須賀城の面積にも匹敵することも、18世紀に成立した御殿とは考え難い点である。

以上のように、歴史的景観も含め、幾つかの方向から当遺跡の性格を追求してみたが、結論的には不明といわざるを得ない。しかし、出土した陶磁器のなかには江戸時代の庶民とは無縁に近いものもあり、「とのさまがこい」の俗称のように、殿様との何らかの関連を意識する必要はある。また、焰硝蔵跡と考えられている樹木ケ谷の一部から、鉄砲矢場跡といわれている坂下谷付近には、当遺跡と同様に単なる山路やそれに対応する施設とはいえない遺構がある。これらは、丘陵の斜面や稜線にそってみられる山路であるが、土塁や石段も併設されている。また、路幅も2mを越えることがあり、石段は幅1m前後である。このような規模の例は、一般生活用の山路としては大き過ぎるばかりか構造も丁寧過ぎるといえる。このような遺構を、横須賀城周辺の環境と理解すれば、当遺跡における遺構もその一部として位置づけることは可能である。

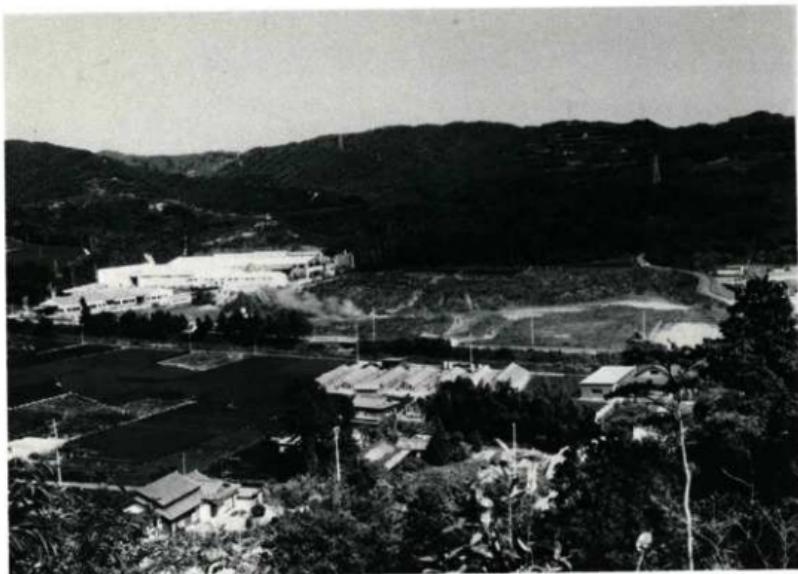
(柴田 稔)

注

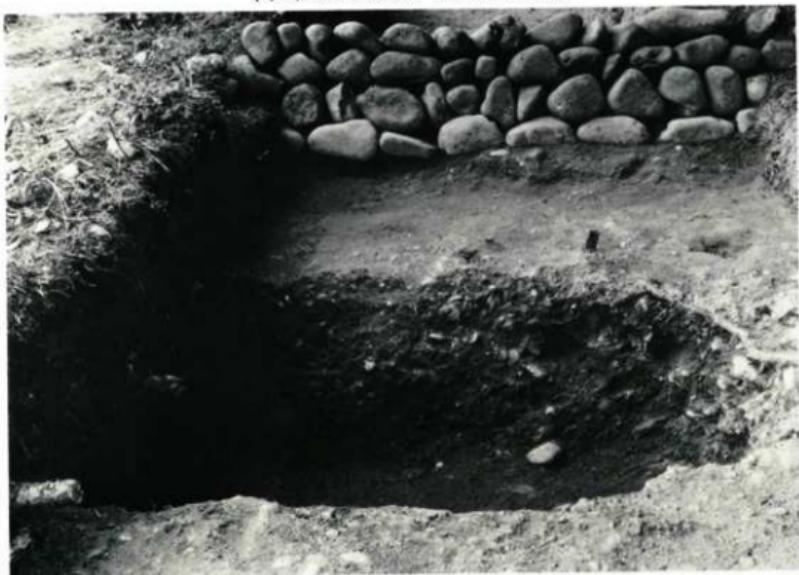
- 1) 調査報告書、1983
横羽町教育委員会 参照
- 2) 大須賀町小笠山、景江山撰要寺文書、大須賀町誌編纂委員会『大須賀町誌』1980 大須賀町 参照
- 3) 井間弘太郎『沖積平野』1983 東京大学出版会
- 4) 斎田有城『清ヶ谷窯跡群の概観』『清ヶ谷窯跡群白山窯跡』1979 大須賀町教育委員会
- 5) 保利具知賀子耶寿『横須賀原始考』文化年間、原田 和『遠江資料集』所収 1960 美哉堂書店

- 6) 静岡県 『静岡県史 第3巻』 1972 復刻 名著出版
- 7) 斎藤 忠也 『史跡横須賀城跡』 1984 大須賀町教育委員会
- 8) 不明 『横須賀三社権現鎮座本起并御城主代々』原田 和 前掲書参照
- 9) 高柳光寿 『新訂 寛政重修諸家譜』 1964 続群書類從完成会
- 10) 『武鑑』 大須賀町草全町東照宮保管の宝永4～天保10年の武鑑80冊（一部欠落）から調査、欠落分については検証していない。
- 11) 諸家譜では、利重から4260余石となるが、武鑑では助友から4260余石となる。三社本起では、助久5000石である。また、助友は、諸家譜では明和4年に定火消となっているが武鑑では、明和4年に持筒頭となっており、両者の違いも若干ある。石高は、三社本起5000石、歴代明鑑4500石で4者とも異っている。歴代明鑑には、本多大膳とあるが、本多飛騨守成重の二男重光が祖となる本多家に属し、助久の家譜にはない。歴代明鑑の誤記であろう。その他にも歴代明鑑、三社本起ともに検証できない記事がある。とくに前者における本多家の記事には誤記が多い。
- 12) 积祐念師？ 『横須賀根元歴代明鑑』 元和年間ごろ、原田 和 前掲書参照
- 13) 静岡県 『静岡県史料第4巻』 1966 復刻 角川書店
- 14) 木下寂善 『天台宗大観』 1921 天台宗大観刊行会
- 15) 豊田市誌編纂委員会 『中泉代官』 1981 編者と同じ

図 版



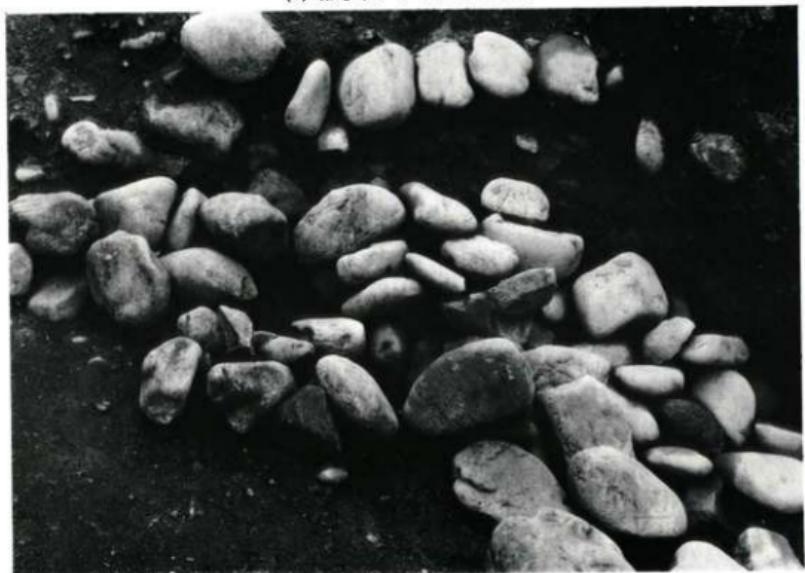
(1) 井戸ヶ谷遺跡遠景（西側尾根上より）



(2) 第2トレンチ溝状遺構と石垣



(1) 第3トレンチ土壠と石垣



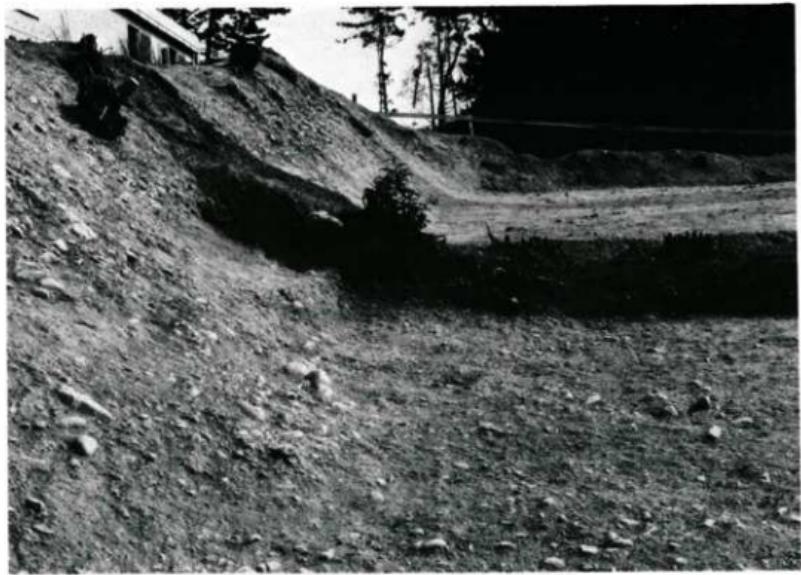
(2) 第4トレンチ石垣と崩落状況



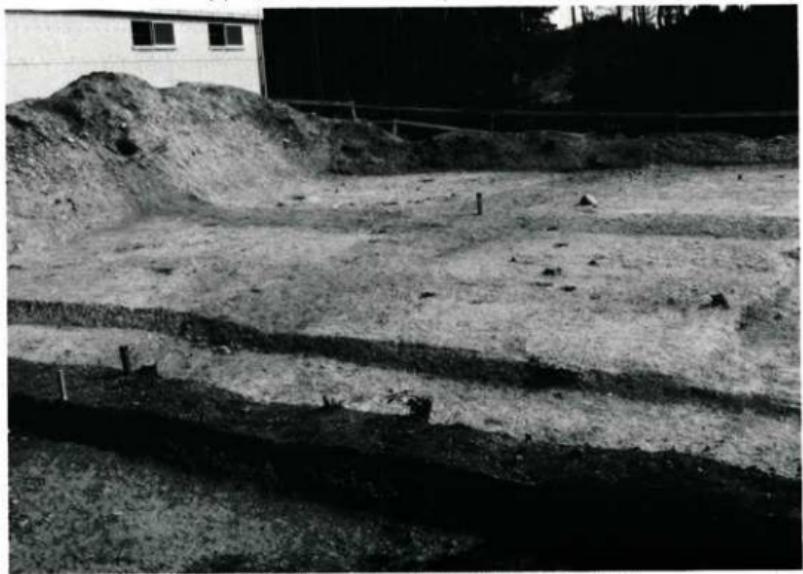
(1) 本格調査地点全景（西側より）



(2) 土壠、平垣部調査前（北側より）



(1) 土壘2調査状況(4、6、8区、北側より)



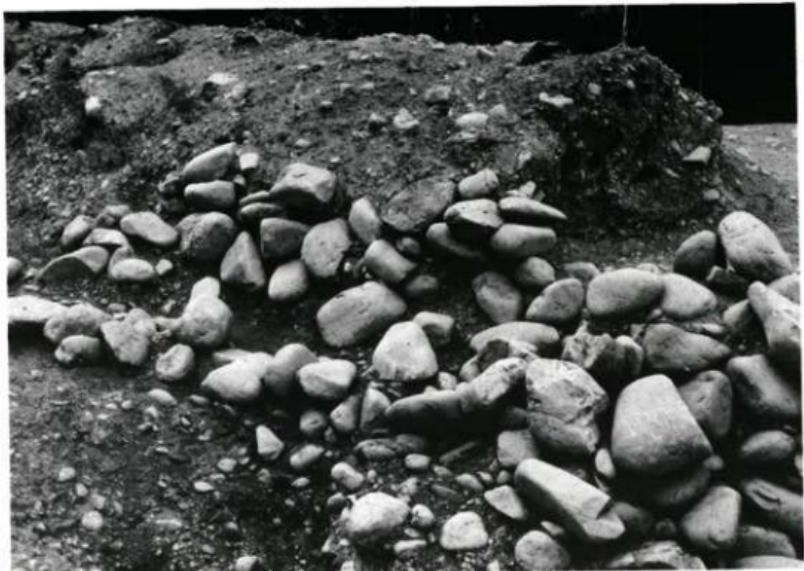
(2) 平坦部、土壘1、土壘2調査状況(4~6区、北側より)



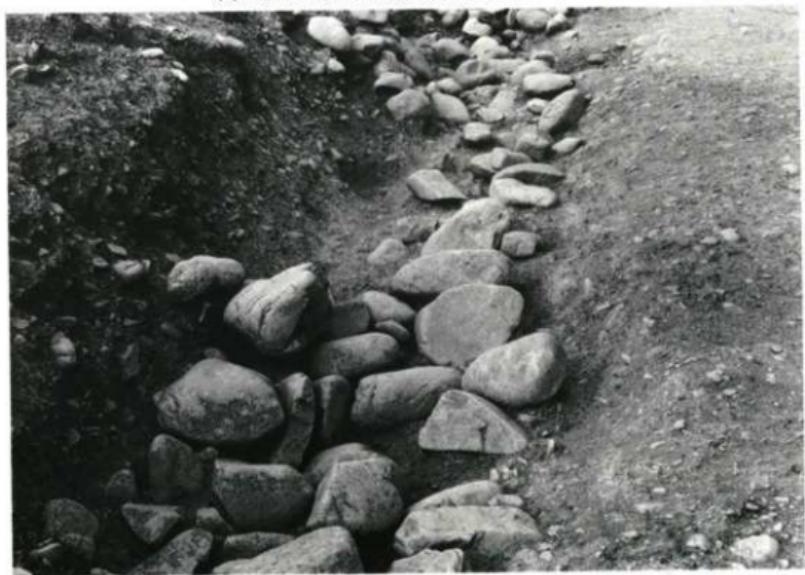
(1) 山路状遺構完損状況（3区）



(2) 土壠1、石垣、山路、溝状遺構調査状況（1、2、3区、東側より）



(1) 土壘 1、石垣、溝状遺構調査状況（2区）



(2) 溝状遺構内石垣崩落状況（2区）



(1) 白磁出土状況（3区）



(2) 完壊状況（西側より）

圖版八 造構內出土遺物

同左(內面)



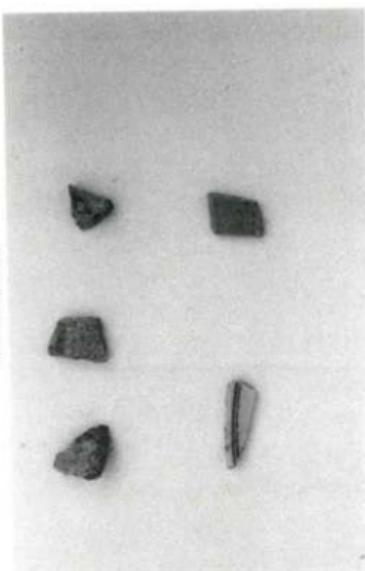
石壠窯落部內出土遺物

土壠內出土遺物



圖版九 造構内出土遺物

同左(内面)

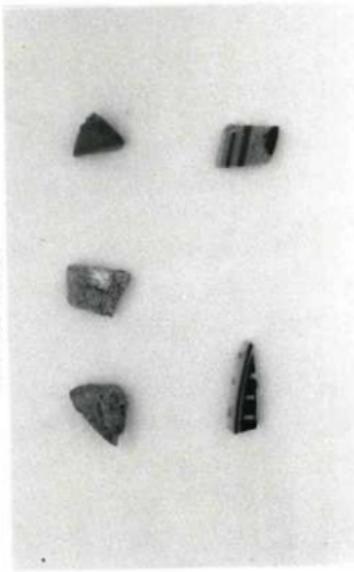


同左(内面)



土壘内出土遺物

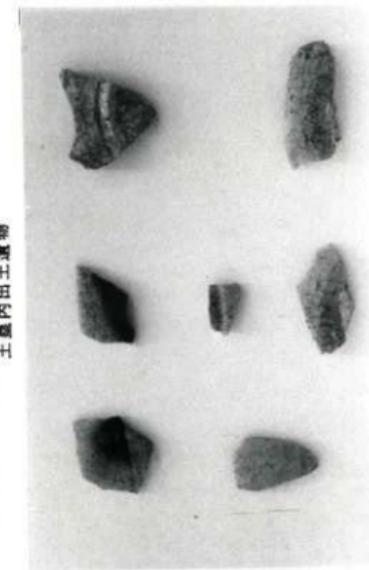
第2トレンチ溝内出土遺物(左下測定、19C)



同左(内面)



古瀬戸(上、14C)常滑(下15C)



土塁内出土遺物



瀬戸・美濃系(16C)長石相、灰陶等

同左(内面)



同左(内面)

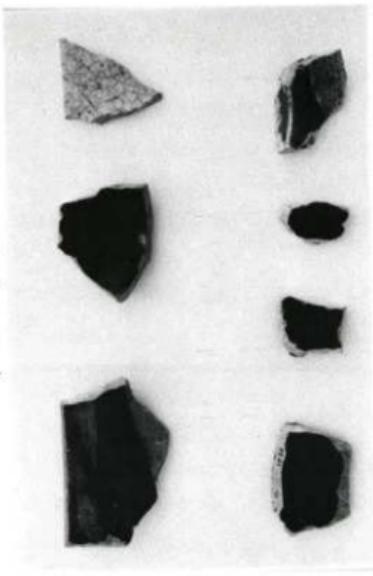
潮戸・美濃系(17C後)灰釉



潮戸・美濃系(17C中~18C)灰釉、緑釉など



同 左 (内面)

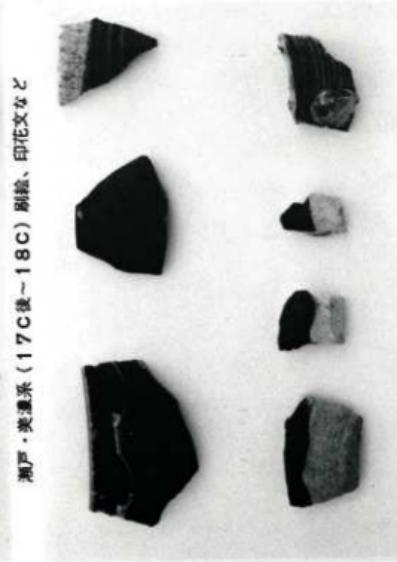


同 左 (内面)

漆器 蓋 十九類



瀬戸・美濃系(17C後~18C)刷絵、印花文など



瀬戸・美濃系(18C)模様・天目など

11

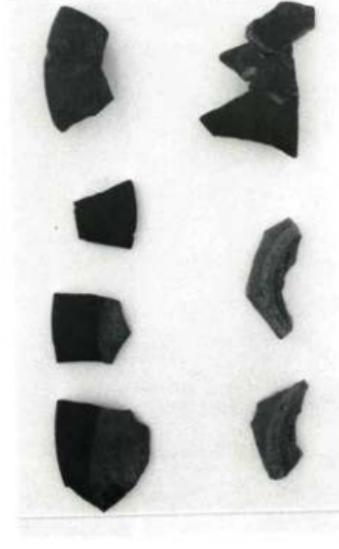
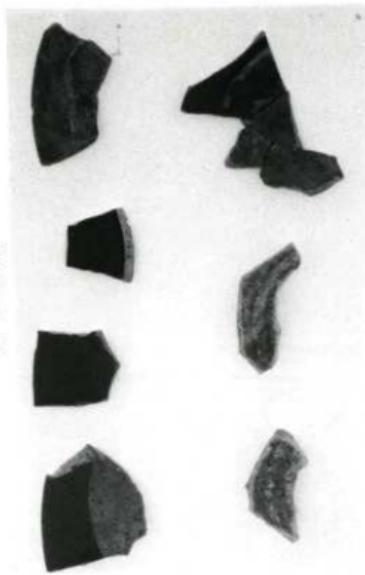
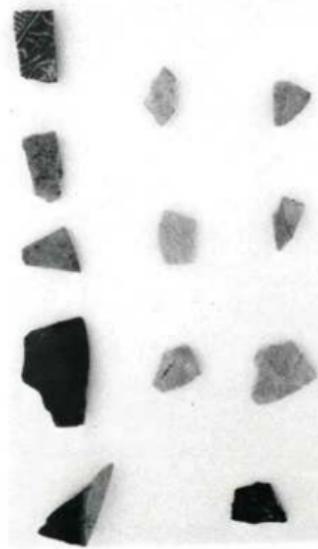
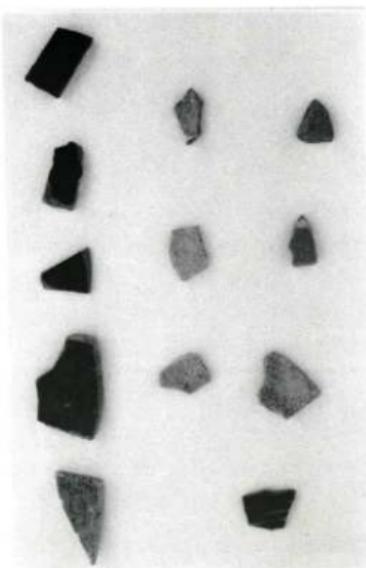
第三回
同左

同左(内面)

唐津系(上18C、左下16C) 京焼系(中~下段18C?)
地方窯系(光戸昌?) (18C) 織船・灰釉など

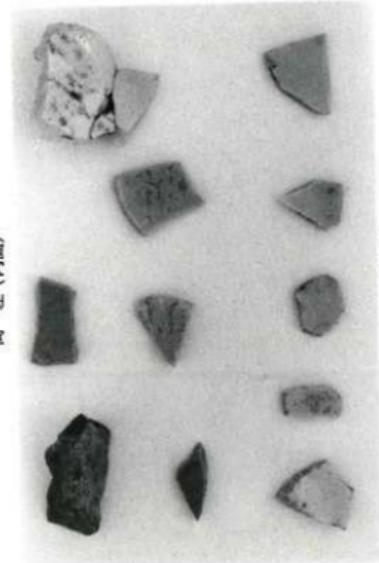
唐津系(上18C、左下16C) 京焼系(中~下段18C?)

同左(内面)



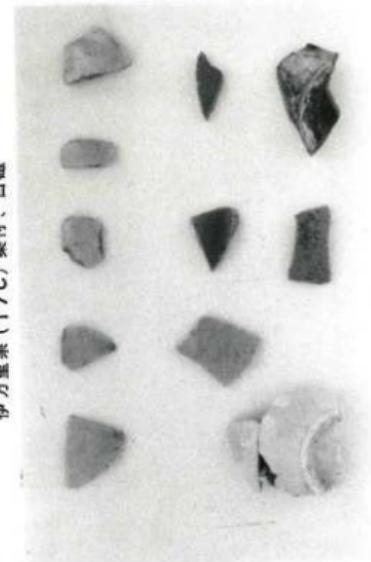
図解 藤井 四十画

同左(内面)



同左(内面)

伊万里系(18C)白磁、青磁

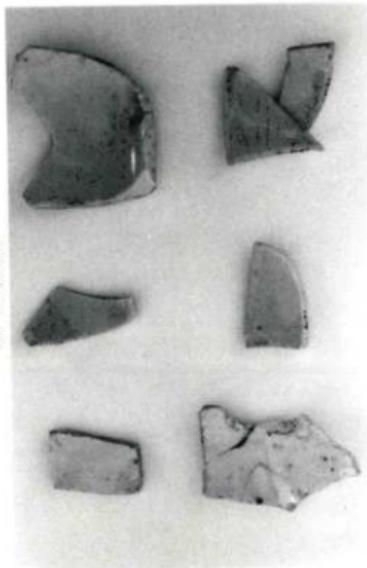


伊万里系(18C)染付、白磁

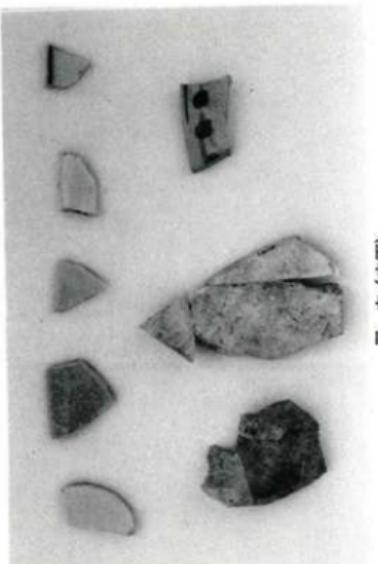


图十 镜面
群磁撞碎

同左(内面)



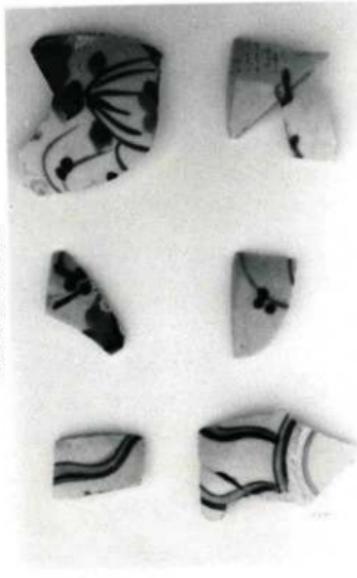
同左(内面)



伊万里系(18C)



伊万里系(18C)





同左(內面)



伊万里系(18C)

1985年3月31日発行

井戸ヶ谷遺跡発堀調査報告書

発行 静岡県小笠郡大須賀町教育委員会

印刷 株式会社 山田印刷所

静岡市二之宮 251

